

王子の後悔

第二稿

井上ゆうき

2025/04/28

△登場人物▽

キット王子(23) ……主人公。

執事(47) ……キット王子に仕える執事。

シンデレラ(19) ……舞踏会に出席し、王子と踊った女性。

○家の前・路上

シンデレラが仕えている家の前の路上。

女性が椅子に座り、裸足の片足を前に出している。

顔は見えない。

キット王子、息を呑みながらゆつくりとガラスの靴を足に入れる。

周囲には多くの従者が集まり、それを見守っている。

ガラスの靴が、ピッタリとその女性の足に入る。

従者たち、歓声を上げる。

従者のうち数人が「よかったですね王子!」「やつと見つかりましたね!」と王子に声をかけている。

王子、周りに笑顔を振りまいているが、どこかぎこちない。

タイトル 「王子の後悔」

執事、安堵した顔で王子に声をかける。

執事 「王子、おめでとうございます」

王子 「(小声で執事に) ちょっと。(周囲に) しばしご歓談を!」

王子、執事を引っ張り、椅子から少し離れた木陰に移動する。

○同・木陰

木陰で王子と執事が話している。

2人の後ろでは、従者たちが喜びの歓声を上げている。

執事 「どうされましたか。何か問題でも?」

王子、発言をためらっているのか、少し固まる。
しばしの沈黙の後。

王子 「...え、全然違くない?」

執事 「…はい？」

王子 「いやあのー、全然違うないかって」

執事 「何がでしょう」

王子 「…顔」

執事 「顔？」

王子 「あんな顔だったっけ？僕と踊った子」

執事、女性の方を振り返って。

執事 「あー、まあ系統はあんな感じだった気がしますけどね」

王子、腕を組んで。

王子 「靴は合ってたんだけどなあ」

王子、女性の方を見て。

王子 「え、まつげの長さとか、全然違うない？」

執事 「そうですかねー」

王子、執事が女性を見る様子を見て。

王子 「もつと、ちゃんと見て。僕の結婚相手なんだから」

執事 「見てますって」

執事、かけているメガネを拭いて、再び女性の方を見る。

執事 「んー、分からないですが、つけまだったんじゃないでしょうか？」

王子 「じゃあ肌は？もつとツヤツヤで、白かっただろ」

執事 「それはファンデーションやコンシーラーですね」

王子 「鼻もあんなに低かったっけ？」

執事 「ノーズシャドウとハイライトを駆使したと思われる」

王子 「現代のメイク凄いじゃん。魔法かよ」

執事 「ですね」

王子 「あと、メイク詳しすぎない？」

執事 「娘がおりますので」

王子 「あー、納得」

執事 「どうされますか？」

王子 「ちよつと、本人か確認してきてくんない？」

執事 「え、私ですか？」

王子 「ほら、早く」

執事 「えー」

王子、執事を小突いて木陰から出す。
執事、女性の元へ歩いていく。

○同・路上

執事、座っている女性に屈んで声をかける。

執事 「あー、念の為なのですが」

シンデレラ 「何でしょうか？」

執事 「あなたが先日の舞踏会で王子と踊った女性であることを確認したく。いくつか質問させていただいてもよろしいでしょうか？」

シンデレラ 「ええ、もちろんです」

執事、シンデレラに何かを聞いている。

王子、遠目からその様子を見ている。

○同・木陰

執事、木陰に戻ってくる。

王子 「どうだった？」

執事 「舞踏会で出会った時間、当日の服装、庭園で会話した内容など、王子から聞いたものと全て一致していました」

王子、頭を抱える。

王子 「まじかー。いよいよ本物じゃん」

執事 「あの人こそ、あなたが探していた女性で間違いないかと」

王子、天を見上げて。

王子 「うわー、なんで靴で探そうとか言い出したんだろ。今さら後悔してきた」

執事 「ですから私は申し上げたじゃないですか。靴のサイズで探すのはリスクだと」

王子 「だってさー。ロマンあるじゃん？」

執事 「ロマンはおとぎ話の中だけで十分です」

王子 「どうしょ」

執事

「私の意見を述べさせていただきますと、告白するのが良いかと。他の子も探すとおっしゃられたら、王子としての威厳が損なわれる恐れがございます」

王子

「…」

執事

「賢明なご決断を」

王子

「よし、分かった。告白してくる」

王子、木陰から出て、シンデレラの元に向かっていく。

○城へ戻る道中・路上（夕方）

従者たちが馬に乗って進んでいる。

王子も馬に乗っているが、その目には涙。

執事、横から王子にハンカチを差し出す。

執事

「王子、これを」

王子、ハンカチを受け取り、目を拭う。

王子

「ありがとう…告白の後にあんなこと言われるなんて…思っ
てなくて…」

○家の前・路上（回想）

シンデレラに手を伸ばす王子。

執事と周囲の従者、固唾を飲んで様子を見ている。

シンデレラ「私に告白なんて。身に余る光栄、感謝申し上げます」

王子

「では、今から私のお城に」

シンデレラ

「でも、すみません！」

シンデレラ、深く頭を下げる。

シンデレラ

「お城へは行けません…」

王子

「え？」

シンデレラ「失礼を承知で、大変申し上げにくいのですが、結婚は辞退させていただければと。会話はとても楽しかったのです！素敵なお方だとも思いました。でも…」

王子

「でも？」

シンデレラ「…顔がタイプじゃなくて…ごめんなさい」

王子「か、顔が？」

シンデレラ「はい。どうしてもタイプじゃなくて」

王子「どうしても…」

シンデレラ「はい。もう、ここからどう仲良くなってもひっくり

返せないくらい、顔がタイプじゃないんです…」

王子、衝撃のあまり膝から崩れ落ちる。

○城へ戻る道中・路上（夕方）

執事、笑って。

執事「顔が違ったのは、お互いさまだったということですね」

王子「余計傷つくから、いま言わないでくんない？」

執事「大変失礼いたしました」

王子、少し考えて。

王子「なあ、お願いがあるんだけどさ」

執事「はい、なんでしょう」

王子「…僕にメイク、教えてくれない？」

執事、笑みを浮かべながら。

執事「はい、是非とも」

2人が向かう先には、夕日に照らされた城が、明るく佇んでいる。

（終）